



TITLE:

ブルック・ファーム

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

---

CITATION:

穂積, 文雄. ブルック・ファーム. 経済論叢 1961, 87(1): 27-51

ISSUE DATE:

1961-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132803>

RIGHT:

# 經濟論叢

第(十七)卷 第一號

---

農民層分解の分析方法……………堀	江 英 一	1
ブルック・ファーム……………穂	積 文 雄	27
シャフツベリの道德哲学(一)……………平	井 俊 彦	52
自由民権運動と府県会(1)……………内	藤 正 中	74
イギリス定期船業の発達と……………山	田 浩 之	97
海運政策(一)		
社会主義経済学の方法に……………上	島 武	112
かんする一考察		

---

昭和三十六年一月

京都大學經濟學會

# ブルック・ファーム

穂 積 文 雄

## 四

かくのごときが、ブルック・ファームの構想である。かかる構想の下に、同志がつのられたのである。だが、その際、リブレイは、さきにも、ふれたごとく、じぶんの構想を文書にして公表することをしなかった。ピーボダイ女史は一八四一年六月二十四日、ボストンからドワイトに書いた手紙の中で、

リブレイ氏はかれの理想に關する詳細な計画をなんらかの通例のしかたで周知させませんし、また、友人たちにさせもしません。<sup>2)</sup>

と、いつているくらいである。それ以前はなおさらのことであつたとかんがえてよからう。それゆゑ、同志をつのるといつても、それは、はなしあいによつたものとかんがえてさしつかえあるまい。ここにはなしあいという中には、個人間のはなしあいもあれば、あつまりにおける談論もある。前者については、さきにかかげたリブレイの手紙<sup>3)</sup>の冒頭の句、や、これもさきにかかげたフラー女史の手紙<sup>4)</sup>を想起すれば、たる。あらためて例をかかげるまでもあるまい。後者については、たとえば、エマースンが一八四〇年一〇月一七日の日記<sup>5)</sup>につぎのごとき記入をし

ているのをかかげて、それをしのぶすが、とすることが、できよう。

昨日ジョージ・リブレイ夫妻 (George and Sophia Ripley) マーガレット・フーラー、および、オルコットが、ここで、社会計画 (the Social Plan) について談論した。

さらに、このはなしあいには手紙によるそれもふくめてよからう。そして、それについては、さきにかかげたりブレイの手紙が、なによりも、よい例である。あえて、ことばをついやすまでもなからう。

そのような、しかたでも、効果はあがった。ひとびとは関心をいだいた。関心をいだいたからといって、そのものが、かならず、同志として加入するとはかぎらない。そういえば、もとより、それは、そのとおりである。それに、ちがいはない。たとえば、エマースンが、そのよい例である。かれが、いかに、ブルック・ファームのくわだてに関心をいだいたかは、いまにのこる、かれの書翰・日記が、あきらかに、それを、証明してくれる。しかし、かれは、ついに、加入はしなかった。そうはいうものの、関心をいだいたひとの中から同志として乗り出して来るものがあるのにふしぎはない。ふしぎがるものがあれば、むしろ、その方が、どうかしている。そう、いつてもよいのではあるまいか。事実、同志のひとびとはあらわれた。それでは、かれらは、いかなるひとびとであったか。ホーソンは、その、ブルック・ファームにおける体験を盛った作品、「ブライスデール・ロマンス」の中で、カバーデール (Coverdale) をして、かれらについて、つぎのごとき述懐をさせている。

かれらは、たいてい、普通のしごとで、不快な経験をなめてきたひとびとであつた。しかしながら、かれらは、将来に対する希望・信念をうしなうほど、まだ、老境に入ってもいなければ、また、それほどまでに、ふかい打撃をこうむつてもいなかった。おたがいにごころをくらべて、かれらは、この年月、コミュニチーの理念が無言・無意識の中に、成長をつづけていたことを

発見したことも、しばしばであった。かれらの中には、思慮ふかい・きついし・わをきさんだ顔があつた。まじめで陰気なひたい、だが、目はめがねを必要としない。ただし、学生用ランプのひかりのために早期にかすんだのは、このかぎりでない。そして、かみは銀線をしめすことまれである。過去に拘泥し、習慣の石のような層でおおわれて、柔軟性をまったく喪失した老年は、このようなくわだてにおいては、とうもない場ちがいであるう。人世のあげほのにある若年も、また、われわれの目的に、ほとんど適合しなかった。けだし、若年は、じぶんの精神で、われわれが朝のひかりが消えるのを見るか、れくさや不毛の砂の上にそれがかがやくのをみるからである。なるほど、われわれは、わかいひとびと——黎明期の少年、一〇代のばらいろの少女、および、せいぜい、膝をこすくらしいのせたけの子供——とともにいる。だが、それらのものは、主として、教育のために、ここに、おくられてきたものである。そこで、われわれは、まちやその他から寄宿人をうけいれる。そして、かれらは、われわれとともに、家族的生活をおくり、大なり小なり、われわれの理論に共鳴し、ときには、われわれとともに労働する<sup>6)</sup>。

なお、いま、われわれの問題としてゐる点については、ラフカディオ・ヘルン (Lafcadio Hearn) が『わのうとく』述べてゐるのを引くのも、無意味ではあるまい。

まことに、ブルック・ファームは、はなはだ、ふしぎなところで、たくさんのお名の男女を擁した。後にニュー・イングランドの文学界——わたくしは、アメリカの文学界とさえいいたい——において頭角をあらわしたひとの多くは、このコンミニチーのメンバーであつたか、あるいは、このコンミニチーの親友であつた。ホーソンはメンバーであつた。エマースンは忠実な友人であつた。ニュー・イングランドの学校の名簿をみることは、ほとんど、ブルック・ファームの著名なメンバーの名簿をみるのである<sup>7)</sup>。

そして、ついでに、小泉八雲全集にみられる、つぎの訳者註を添えるのは、かならずしも、駄足ではあるまい。

アメリカの学校の名簿は殆ど固有名詞になって居る。たとえば、ワシントン・アーヴィングをその名につけて居る学校はいくちあるか分らない。それでこの会員であった程の人は皆著名になって学校の名につけられて居ると云ふ意味<sup>8)</sup>。

さて、これら、同志として乗り出してきたひとびとが現実の社会にあきたらぬおもいをいだくひとびとであったことは、あたりまえといつてよからう。また、かれらが、社会改革の理想に燃えるひとびとであったことも、あやしむにあたらないところであらう。ところで、それでは、かれらの現実の社会に対する厭惡の情は、はたしていかにあったか。かれらの社会改革に対する理想への情熱は、事実、どのようなものであったか。わたくしは、すずんで、それをあきらかにせねばならない。そして、そのために、わたくしは、フォーカスをホーソンにあわせようとおもう。けれど、かれは、もつともはやく加入したものの一人であり、しかも、ブルック・ファームの初期においても最も重要な人物の一人であるからである。ブルック・ファームの初期を「ホーソンの時期」(“Hawthorne Period”)とするのも一案だといわれているぐらいである<sup>9)</sup>。もつとも、それはかれが初期のブルック・ファームについて、かずかずの貴重な資料をかきのこしているからともかんがえられる。また、ホーソンがブルック・ファームのくわだてに加盟したのは他に、一つの、直接的な、かつ、実動的な動機があったことが指摘されてもいる。すなわち、かれは、当時、ユリザベス・ピーボディの妹のソフィヤ (Sophia Peabody) と婚約の仲であった。そしてそれは、すでに、二年におよんでいた。しかるに、かれは結婚生活に入るだけの経済的基礎をもたなかった。それを、かれは、ブルック・ファームに期待した。また、かれは、文筆を断念しなくなかった。しかも、かれには、まだ、文筆一本で立つ自信がなかった。ペンを乾さないでくらす道を、かれは、ブルック・ファームのほかにみいだすことができなかった<sup>10)</sup>。それは、たしかに、そのとおりであらう。わたくしは、それを否定しようとするもので

はない。しかしながら、だからといって、かれが現実の社会を厭悪し、社会改造の理想にその情熱をたぎらせたことを無視したり、否定してよいという理由はなりたたないであろう。いな、かれは現実の社会を厭悪し、社会改造の理想に情熱をたぎらせた。そして、ブルック・ファームのくわだてに共鳴し、その成功に純粋な信念をいだいた。なるほど、かれの、それまでの生活や気質からすれば、寮生活や共同食事や団体行動がかれに適するとはかんがえられぬかも知れぬ。それは、たしかに、そのとおりであろう。したがって、かれの伝記をかくものにとっては、かれがこのような、夢想家のなかにくわつたということは、一つの解しがたい、ものであり、説明にくるしむところであろう。しかし、それにもかかわらず、事實は、やはり、事實である。それは、どうすることもできない。それは、たとえば、かれが結婚者ソフィヤに書いた手紙をみれば、あきらかなところである。それは、かれがその「アメリカン・ノートブックス」に記したところをみれば、うたがう余地のないところである。それでは、それは、いかに、そうあつたか。それをこれからうかがおうとおもう。だが、わたくしは、ここでは、右の資料によらないで、かれの「ブライスデール・ロマンス」によることにする。「ブライスデール・ロマンス」は、一八五一年から一八五二年の執筆にかかる。それは一つの小説である。小説である以上、フィクションがある。テーマもある。そして、テーマはそれを読むひとによって、かならずしも、おなじにうけとられるとはかぎらない。したがって、それをもつて、ブルック・ファーム生活のルポタージュとするものもあれば、社会主義の主張とするものもある。また、それらに反対して別箇の見解をとるものも出る。それにふしぎはない。しかしながら、この小説に、かれのブルック・ファームの体験がたくさん織りこまれていることは、うたがうことのできないところである。なによりも、著者のホーソン自身その序において、つぎのごとく述べている。

著者は、かれがこのコミュニチー(ブルック・ファームをさす——訳者註)を念頭においていたこと、それから、(しばらく、さいわいにも、したしく、それに關係していたので)かれが、以下の頁における創作(fancy sketch)に、いっそう生色をあたえようとおもって、往々、かれの實際のおもい、でを利用したこと、を否定しようとは、おもわない。

そして、いま、「ブライスデール・ロマンス」を前述の資料、とくに、「アメリカン・ノートブックス」と対比するとき、ひとは、容易に、「ブライスデール・ロマンス」において、ブルック・ファームをうかがうことができることを、みとめざるを得ないであろう。さらに、「ブライスデール・ロマンス」において、ナレーターの役割をはたしているキャラクターのカバーデール(Coverdale)においてホーソンそのひとをみることを、いなむことは、できないであろう。けだし、いなむには、兩人の共通性があまりにも顯著でありすぎるからである。すなわち、「兩人は、ともに、独身であり、三流作家(minor authors)である。かれらは退嬰的であり、ある程度の孤独がかれらに必要であると信ずる。かれらは、ときに、シガーをくゆらす。ワインをたしなむ。カーライル、フリーエーを読む。そして、ことのほか、炉辺をこのむ。日常の行動もおなじなれば、その感応も、また、おなじである。すなわち、いづれも、肉体労働にほこりをもつ。が、やがて、それに、いや、きがさす。その原因の一部は、肉体労働が文学活動のためのエネルギーをうばってしまうことにある。いづれも、はじめは、コミュニチーに永住するつもりである。が、その将来について信念をなくする。ときとして、じぶんの、以前の、希望を、回顧して嘲笑する<sup>11)</sup>。」

だから、いま、われわれが、「ブライスデール・ロマンス」に登場するカバーデールによってホーソンの、当時における、現実の社会に対する厭悪、社会改革の理想への情熱を、さぐることは、なんら、邪道におちいるもので



はないといつてもよいとおもう。

それでは、それは、どうあつたか。まづ、現実の社会に対する厭惡の情からうかがおう。カバーデールは、コンミニューチー到着早々かぜを引くが、病後、かれは、こう述懐する。

いまや、わたくしは、ふたたび、おきあがつた。わたくしの病氣は二つの生活の間の通路であつた。ひくい、アーチがたの、うすぐらい戸口、それをとおつて、わたくしは、四つ、んばいをして、いはば、ふるい因習の生活から、はい出て、かなたによこたわる、より自由な領域へ、はいることができたのである。この点においては、それは死のようなものである。そして、やはり、死と同様、それをのりこすことは、よいことである。それ以外、わたくしは、かずかぎりない、愚劣・虚飾・偏見・陋習、および、その他、街道を行く群集の上に、いやおうなしに、ふりかかつて、いくら、かれらが、朝露をふんで、すがすがしい巡歴をはじめても、ひるまでには、かれらを一樣にきたなくしてしまふような、世塵を、はらいおとすことはできなかった。わたくしの骨の上の物質そのものが、すでに、わたくしが、これまでなれてきた生きかたよりも、より真実な、より力つよい生きかたをするのに、適していなかった。そこで、わたくしは、きふるしてほろぼろになつたか、または、季節はづれの、衣服を、いつでも、そうするように、それを、かなぐりすてて、しばらく、骨でふるえてから、まえのきものよりも、いつそう満足に、あたらしいきものを、まといはじめた。まったくのところ (In literal and physical truth)、わたくしは別人となつた。わたくしは生新な歓喜の感覚をもち、それによって、精神は死のおもに、を地上のはかばかのこし、ちょうど、わたくしがうしなつた肉を氣にかけぬとおなじに、それがどうなるうと氣にかけないで、スピリットは永遠の進化のつぎの舞台に入るであらう。<sup>12)</sup>

つぎに、社会改革の理想の情熱についてうかがおう。われわれは、それを、カバーデールがコンミニューチーに到着した晩、すなわち、あたらしい社会における最初の晩、窓外のふぶきをながめながらもらすつぎのごとき感慨か

ら、くみとることができようであらう。

そして実のところ、たそがれが、それからしずかに、また、わびしく、せまうて、そのはい、いる、または、くるいろが、ふりしきる雪にまじりこむと、陰鬱な様相を呈した。たそがれどきのあらしの様相は、まったく、荒涼たるものである。それは、とくに、われわれのために生じた一つの象徴のようにおもわれた。——冒険の前夜に、たえず、われわれの心中を去来して、われわれを、世の常の生活によびかえすために、警告する、つめたい・ところばそい・たよりない・まぼろしのひとつの象徴。

だが、われわれの勇氣はくじけなかった。われわれにとっては、まどうつふぶきも、さらさらとこずえをわたる風のそよぎとおなじこと、そのために意気が阻喪することはない。われわれにとっては、これにまさるかがやかしい季節は、ほとんど、なかった。もし、ひとあつて、合法的に、醒めて、夢をみ、きくひとの嘲笑・侮蔑をおそれず、そのとつびな幻視を口にするとすれば、——さよう、かれら自身、および、人類のための地上の幸福について、かたり、それを、希望をもって追求すべき目的であり、おそらく到達しうるものである、というとなれば——このもえさかる火をかこんで半円形をかたちづくっているわれわれこそ、まさに、そのひとであった。われわれは、さびついた鉄でできた社会の骨組みを、われわれの背後にすててきた。われわれは、たくさんの障害を、打破してきた。それらの障害は多くのひとびとを既製の制度という踏み車に——その退屈さを、それらのひとびとは、われわれ同様、ほとんど、たえがたく、感じてさえたのであるが、それでも、なお、かつ——しばりつけるにたる力をもつていた。われわれは説教壇を降りた。われわれはペンを投じた。われわれは帳簿をとじた。われわれは、結局において、人間の手に入れることのできる・たいていの享樂にまさる、あの、あまく、ひとをとろかし、ひとを骨ぬきにする、ふしようをふりすてた。われわれの目的は、これまで、ずっと人類社会の土台であった・虚偽の・残酷な原理以外の原理によつて規制せられる生活の実例を人類にしめすために、われわれが、これまでに、得たもの、一切を、放棄するにある。それは、きまえのよいものである。それは、たしかに、そうである。そして、それは、きまえのよさに、びつたりと比例するほど、とほう

もないことである。それは、うたがないところである。

そして、なによりも、まず、われわれは、われわれのほこりと、絶縁した。そして、そのあとを、親密の情でうづめようとつとめた。われわれは、われわれ自身の筋肉をつかつて、われわれの当然のしごと、その分担分を遂行し、はたらくひとびとの労働の大きなおもいにかるくしようとした。われわれは、われわれの利益を相互扶助によつてもとめる。われわれの利益を敵より強奪しない。われわれよりものろいひとびと（もし、そのようなひとびとが、実際に、ニュー・イングランドにいるとしたならば）から、だましとらない。また、隣人との利己的競争によつてかちとりもしない。それらのやりかたは、いずれも、それにおいてひとの子は、このむとこのまをるとをわすれず、邪悪をおかすとともに、そのむくいをこうむる (both perpetrates and suffers his share of the common evil)。そして、われわれのインスチュエーションの基盤として、われわれはわれわれの熱心な肉休労働を提供せんとする。祈願とするところは、われわれの種族の進歩のための努力にほかならない。

だから、もし、われわれが、りっぱな城 (ファランステリーズ (phalansteries)) とよべば、おそらく、いっそう適切であらう ( ) をきづき、そして、そのぐるりにわれわれがむらがつている暖爐のあつい石炭の中に、うつくしい光景をえがき、そして、もし、すべてが、消えうせる余燼とともに、くづれさつてしまつて、その後、ふたたび、灰燼よりあらわれたい、としても、恥じまい。わたくしとしては、わたくしが、かつて、世界の改造ができることを実質以上に買いかぶることができたことをよろこぶ。それは人間が生涯に二度おちいることはめったにない過誤である。そうであるとするれば、かく、誤謬を、おおらかに、とつてうごかぬ性質は、いよいよ、稀少であり、いよいよ、高いわけである。<sup>13)</sup>

かくて、現実の社会にあきたらぬおもいをいただき、社会改革の理想に情熱をたぎらすひとびとが、リブレイのブルック・ファームの構想に共鳴し、その勧誘に呼応して乗り出す。乗り出したこれら同志のひとびとはブルック・ファームにおもむく。それははいまでもないところでなければならぬ。それでは、かれらは、いかにおもむいた

か。その、もようは、いかにあつたか。それは、ひとにより、時期により、事情もちがえば、おもむきもことなつたことであろう。それを一々せんざくすることは、いまのわたくしには、あまりにもむづかしく、あまりにもわづらわしい。だから、ここでは、また、例によつて、ホーソンの場合を、「ブライスデール・ロマンス」の記述より引いて、その一端をうかがうにとめることをゆるされたい。

まさにパラダイス！ わたくしは、あえて断言する。世界の中で、ほかのたれも、——すくなくとも、ニュー・イングランドの、われわれの、小さな、ふきさらしの、世界では、たれも——その当時、パラダイスをゆめみなかつた。ゆめみたとすれば、それは極地が熱帯を示唆するのたぐいであつた (except as the pole suggests the tropic)。また、手ちかにあるような材料では、最上の建築家がイヴの私室を模造しても、エスキモーの雪小屋の内にみられるもの以上のものをつくることはできなかった。それは、さきにもちよつとふれたように、四月のある日のことであつた。わたくしの上に黎明がおとずれたとき、市内の気温は、わたくしのように煉瓦の街区内<sup>ブロードウェイ</sup>のたてこんだ家家の一つに寄寓しているものには、家家はおたがい、それぞれ自身の暖爐のあつさの上に、ほかのすべての家のあたかみにまであずかるから、快適といつてもよいくらい、温暖であつた。しかし、ひるころには雪が降つて来て、北東の風のために、街路にふきつけられ、事務的に、屋根や歩道を白一色にぬりつぶしていった。それは、われわれのもっともきびしい一月のあらしといつてもはざしくないのであつた。それは、これから数か月の間雪解けないことを保証されたかのように、熱心に、その任務をはじめたようにみえた。わたくしが、シガーのけむりの最後の衣服をはき出して、わたくしのいごちのよい一組の室・爐格子には火がよくもえており、すぐ手ちかの小房には、まだ一二本の瓶がはいっているシャンパンか、ごとと赤葡萄酒ののこりがはいっている箱がある——を後にしたとき、わたくしのヒロイズムは、たしかに、偉大なものであつた。さよう、わたくしは、これらの快適な宿所を後にして、よりよい人世をもとめて、無情のあらしの中に突入した。

……  
あらしを餌いてすすむ同行四人。……われわれが街路をすすむとき、両側の家があまりにもわれわれにせまって、おさえつけるようにおもわれ、そのために、われわれの偉大な心臓は、その間にかろうじて息をする空間をみいだしたくらいであったのをおもひ出す。降雪も、また、いいあらわすことのできぬほど、おそろしくみえた。(うすぐろい (ding)) といいたいくらいであった。それは市街の煤煙の 대기を通って降って来て、歩道におちるとみる間に、たれかの修繕した靴か、または、オーバー・シューのあとが、たをつけられる。かようにして、ふるい因習の痕跡が空からのもつとも新鮮なものの上にみられた。だが、われわれが鋪道(ペシド)を去って、おおいをした蹄鉄が荒涼たるいなかみちをふみ、その痕がつくつかぬに、むちやくちやに吹きまくる風に消されたとき、そのとき、はじめて、よりよい空気をすることができた。これまで、そうたびたびは、すったことのない、空気！ ごみごみした市街のすべての空気とちがって、嘘偽・形式・過誤のことばとなつたことのない空気！

かくて、われわれは勇を鼓し、速度をはやめ、和氣颯颯、波状のふきよせのなかに・なかばうずもれた・石垣をすぎ、木の幹が雪におおわれた側を北東にさらしている断続する林野をとおりぬけ、通路に足跡のない無伴の別墅(ヴィラ)の見えるところには入り、あちこちに点在して・もえる泥炭の・鼻をさすに、おいをつよくふくんだけむりを・ふきながしている・人家を通りすぎて、すすんで行った。ときどき、旅人に出あつて挨拶の喚声をあげた。すると、むこうは、ふぶきのため、耳、おおいをとかないで、熱心に耳をかたむけ、われわれの礼儀を、こたえる勇をはらうに値せず、とかんがえるように、みえた。「礼儀知らず！」(Chut.)。風のヒューヒューなる音はわかつて、われわれのおだやかな同朋の調子はわからない。われわれのこころからの同情における旅人のこの信頼の欠除は、世界の改造のために、われわれが、いかに困難な任務ととくんだかをあらわす無数のしるしの一つであった。でも、われわれは、気をおとすことなく、すすんで行った。そして、あらしと、とても、親密になった。そのため、

旅のおわりには、そのあらあらしい・ちきすさを相手に、「ちようなら」せいで気が、ほとんど、なくなった、と、述懐したものである。

かくて、いまや、同志のひとびとはブルック・ファームにあつまる。そこで、わたくしの叙述もブルック・ファームにうつるであらう。

(1) 前掲、拙稿、ブルック・ファーム、(自) 経済論叢、第八六巻・第四号。

(2) Zoltan Haraszti, *The Idyll of Brook Farm*, Boston; Public Library, 1937, p. 18.

(3) See (1)

(4) See (1)

(5) *Journals of Ralph Waldo Emerson*, edited by E. W. Emerson and W. E. Forbes, Boston; Houghton Mifflin Company, 1911, V, 473.

(6) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance* (*ibid.*) pp. 84-85.

(7) Lafcadio Hearn, *A History of English Literature*, Tokyo, 1927, Vol. II, pp. 896-897.

(8) 小坂八重生集、第一書院版、大正十五年、第一三巻、五〇五頁

(9) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 49.

(10) For Example, see Nathaniel Hawthorne, *ibid.*, (Introduction, by Arlin Turner), p. 7.

(11) *ibid.*, pp. 13-14.

(12) *ibid.*, pp. 83-84.

(13) *ibid.*, pp. 45-47.

(14) *ibid.*, pp. 37-40.

## 五

ブルック・ファームでは、一八四一年四月のはじめに、リブレイが、うつり住んだ。ピーボディ女史が、同月二十六日、ボストンからジョン・ドワイト氏にかきおくった手紙に、「リブレイ家のひとびとはかれらの場所にうつってから三週間になる」(The Ripleys have been three weeks yesterday at their place——)とある。してみると、リブレイがブルック・ファームにうつり住んだのは四月四日のことになるといつてよからうか。右の手紙は、また、ウイリアム・アレン(William Allen)と、エリス・バーカー(Elise Barker)の二人は四月はじめの二週間にについている、ということをも、つたえている。この二人は、既舎を清掃し、家屋を整備し、耕作を開始している。ミルクしぼりも毎日やり、牛の手入れをよくしたので、ミルクの量は三割がた増大したということである。ついでながら、ホーソンのついたのは四月の十二日である。こうして、ブルック・ファームの生活ははじまった。そのころのことをうかがうため、リブレイ夫人が同年五月六日にジョン・サリバン・ドワイト(John Sullivan Dwight)にあててかいた手紙をみるのも、意味のないことではあるまいとおもう。それで、ここに、それを引く。つぎのごとくである。

わたくしたちは、いなかに、おちついて、まったく、のんびりしています。わたくしたちおたがいのあいだが、は、きわめて、自然であり、忠実であります。まるで、旧知のようです。わたくしたちの大きな、中央の台所の食卓にあつまる人は一二三人で、やがて、一人になります。妹は来週、さらに八・九人をつれて、かの女の家をひらきます。あなたは、わたくしたちのかしら役(our head-man)のウイリアム・アレンのいろいろのとりえ(merits)をおききになれば興味をおおぼえになることでしょ

う。かれは賢明であり、洗練されており、よくはたらき、かつ、ひとずきをするひとで、なんでもこころえています。ファレーイ氏 (Mr. Farley) は、いくらほめてもほめきれません。いつも油断がなく、あらゆる労働に熟達しておられ、農場では最大のはたらきてであり、食卓では無敵の機警の士であり、パーラーでも、どこでも、洗練された紳士であります。……ホーンソンは尊敬すべき紳士です。ひとのたましいを、とてもさわやかにするあのふかい感嘆をもって感嘆すべき紳士です。かれは王子さまです。——あらゆるお点において王子さまです。——それでいて、かれは、いかなる労働をいやしむことなく、なや、においてものら、においても、とても、強壯です (athletic and able-bodied)。バートン氏 (Mr. Burton) は役にたちます。そして、(わたくしどももなかで) わたくしどもの社交界の魅力に加うところはないといはしても、それをさまたげることもありません。ジューン・タッカーマンの (Jane Tuckerman's) 兄弟の一人である一四才のわかい子が労働の訓練をうけておりますが、この子はわたくしどもにとって、いつも、たのしみです。非常に活動的であり、惻愼な一六才のわかものが牛追いをしています。かれはなによりも音楽を愛し、つぎに牛を追ひ、それから、コールリッジを読んでみずからをなぐさめます。ロイド・フリーラー (Lloyd Fuller) は(わたくしどももなかで、また) フリーラー家のひとびとの短所を、みな、そなえ、その長所はもっています。さんが、手に負えないなかまが、他のひとの影響によって、いかに抑制せられるかを、わたくしたちに示すことに貢献しています。スレード姉妹 (The Miss Slades) は当分わたくしどもと一緒に生活しています。そして、ただいまわたくしどもが訓練している少年が一人います。かれは、わたくしどもの、ちいさなバレンチン (Valentine) に対するオルソン (Orson) の役をつとめています。そして、次第に教養の影響に身をゆだねて行くかれをみるのは、わたくしのもっともたのしいことのひとつです。かれの顔の表情までが (The very expression of his countenance) かわりつつあります。メイン (Maine) からきた快活な少女が一人いて、家事のてだすけをしてくれています。そのしとは市中の労働にくらべばかるいものです。そして、わたくしは、毎日、ベントン氏 (Mr. Benton) のちいさい娘さんと、いなかからくるわたくしどもの姪が、さらに一層、わたくしたちのて



だすけをしてくれるのを、まちのぞんでいます。ブラッドフォード氏 (Mr. Bradford) は月末にわたくしたちにお加わりになります。そして、チャールス・ニューカム (Charles Newcomb) は、天気になり次第に、ここに来ることになっており、ただその日を待っているだけです (only waiting for the first pleasant day to come)。わたくしはすぐにもクラスをつくり、わたくしのむかしの職業をたたびはじめようとおもっています。わたくしたちは、みな、わたくしたちの体力が予想に反しつよいのをよろこんでいます (All of us are agreeably disappointed in our physical power)。とりわけシェージがそうです。かれは、しごとを量を一日にとどめて、ますます元気を加える一方です (does a harder day's work each day than the last, and feels better than ever before……)。

こうして、ブルック・ファームの生活がはじまる。しかし、その日日の状況は、すでに、冒頭に示したところによってうかがいえるところである。したがって、あらためて述べることをしなくてもよからう。だが、あの状況は、わたくしのまぶたにうかんだそれである。かならずしも充分とはいえない。それに、初期の特殊相で、かならずしも、あれによって、あきらかにつたえられない面が、あるようにも、おもわれる。すくなくとも、ここに、なお若干の記述をこころみることが、かならずしも、無駄とはいえないものがあることは否定できない。そこで、しばらく、それをこころみたい。

ブルック・ファームの生活は農業と教育を中心として展開した。それは、いうまでもないところである。だが、牧畜もおこなわれた。それをわすれてはいけない。ホーンソンの「アメリカン・ノートブックス」の一八四一年九月二十七日の記入に、「昨朝、家畜の週市の日 (the day of the weekly cattle fair) にあたるので、ブライトンに行った (A ride to Brighton)」とみえている。そして、ウイリアム・アレンと一台の車に一匹の牛をのせて売りに

行き、四頭の小家を買って帰ったこと、それは、いまふとて、二三週間の中に居ることになっている四頭の家の補充のためであること、などが、しるされている。ついでながら、ホーソンは、このブライトンの家畜市に非常に興味をもったようで、いろいろと詳しい観察・記録をのこしてくれている。そして、その中に、われわれは、つぎのごとき感想をみいだすことができる。

家畜はあちこちの農場からつれてこられたものである。それらの農場の数は一〇〇にものぼろうか。それとも一、〇〇〇にもおよぼうか。だが、かれらは、みたところ、しごく、ながよい。すこしも、けんかをしない。かれらは、ほとんどみな、一つの経歴をもっている。それは、うたがいないところである。もし、かれらが、それをかたることができさえすれば、——牝牛たちは、いづれも、これまで、じぶんのミルクを家族を扶養するために、提供してきたものである。——これまで、牧場をさまよい、帰宅してなや、に行ったものである。——これまで、家族の一員として遇せられ、ブリンドル (Brindle) とかチェリー (Cherry) とかいうふうに、名をつけられていたものである。牝牛どもは、おもいくびきのために首をまげて、これまで、長年の間、耕作につとめ、ほしくさづくりのときにはたらき、かれらの主人の畜舎を知ること、なお主人がその食卓を知るにも、おきおき、おとらないぐらいであったものである。わかい小牛たちや、ちいさい小牛たちでさえも、その周囲に、なにか、家の神聖 (domestic sacredness) といったものを、ただよわせていたものである。というのは、こどもたちは、これまで、かれらの成長をみまもり、かれらの背をかるくたたき、かれらとたわむれてきたものであるからである。そして、かれらは、みな、ここにいる。おいも、わかきも、かれらの一、〇〇〇の家畜からブライトンの市にあつめられて。そして、ここから、かれらの運命は、屠殺場に行き、そして、それから腰肉・骨つき肉、および、そのような肉片となつて、ボストンの住民の食卓におくられる、ということに、まづ、まちがいはあるまい。

いかにも、文学者らしい感想である。そぞろに、読むひとの胸をうたないではおかぬものがあろう。それにしても、

なぜ、また、ここに、このようなものを引くか、と、いふかるひとがあらうやもしれない。そこでわたくしは、その理由をつげる義務を感じる。だから、それをしるしておこう。理由というのは、ほかでもない。家畜市場で家畜をみてこのような感慨にふける。それは、まことに、インテリらしい感傷である。そこには、インテリの面目躍如たるものがある。そういつてよからう。ところで、ブルック・ファームにはインテリが多い。そこに、この農場の大きな特色がある。しからば、この感想は、やがて、ブルック・ファームのアトモスフィアをつたえるのに、なにほどの役割をはたすにちがいない。そうかんがえてよからう。すくなくとも、わたくしは、そうかんがえる。それだからである。

つぎに、わたくしは、さきにブルック・ファームの生活は農業と教育を中心として展開するといったが、その間、講演・討論のあつまり・音楽・ダンス・パーティーなど、文化的なまよ、おし、がしばしばおこなわれた。それが、また、実に、この社会の一つの大きな特色である。そういつてよいであらう。したがって、それらが、本稿冒頭の状況の中においてうかがわれたのは、もとより、当然である。しかし、ビクニック・パーティーはそこにあらわれていない。そこで、ここに、その一例をあげるのも、かならずしも、無意味ではあるまい、とおもう。わたくしは、それを、ふたたび、ホーソンの記録によって、ころみるであらう。

昨日、フランク・ダナ(Frank Dana)の誕生日、かれ一〇才に達す。そのため、森にてビクニック・パーティー。わたくしはディナーの後、ブラッドフォード氏とうちつれて森に行った。そして、ひっそりした、林間の空地で一人のインディアンの西長に会った。かれは毛布マフラーをまとい、羽毛でかざり、顔に塗料をつけた、独特の装束で、銃で武装していた。ほとんど同時に、一人のわかいジブシーのうらない、人が林の中からあらわれて、わたくしの運勢をうらなおうと申し出た。そして、かの女がうらなっ

ているところへ、女神ダイアナ（下界ではエレン・スレード嬢（Miss Ellen Slade）で知られている）が矢を放って、みごとに、わたくしの手を射た。このうらな、人と女神はみことな対照であつた。ダイアナは金髪・白晰・静穏で適度の沈着を持った少女。ジブシー（オラ・ガネット（Ora Gannett））は、明朗・快活・黒髪・濃色の皮膚の少女。二人とも、すこぶるの美人。その美は、すくなくとも、十五才の少女をもつてして人を悩殺せしむるに足る。これら森の住人たちをひきつれて、われわれはすすんで行った。そして、異様な風体の一団のところに達した。かれらは、ダンスや競技をするために円陣をはつていた。スウィス娘・インディアン女・ニグロー（a negro of the Jim Crow order）・山林の住人、そして、数人のクリスチャンの服装のものがいた。さらに、あらゆる年齢の子供たちがいた。それから、子供らしい競技がはじまった。その競技には、おとも加わつて、はしやいだ。——その間、わたくしは、スポーツでもだいいじな問題でも、單なる傍觀者にとどまるのが性分で、木の下にこたわつて、ながめた。その中に、すでに一、二時間前に到着していた、エマースン氏とフラー女史がわれわれのあつまっているところにやってくる、はなしに花がさいた。

おわりに、ブルック・ファームの生活には自由の空氣がみなぎつていたことをいうのをわすれてはならない。それは、また、このコミュニティの大きな特質の一つである。それゆゑに、もちろん、冒頭の状景のところにおいても、それはうかがえるかとおもう。しかし、このことは、いくらいつても、いいすぎにはなるまいとおもう。そこで、ここに、なお、若干の記述を加えてもむだにはならないであらう。

ブルック・ファームの成立にトランセンデンタリズムの影響があることは、われわれのすでにみたところである。トランセンデンタリズムが個人の自由を極度に尊重するものであることは、われわれのすでにこれをあきらかにしたところに属する。しかれば、ブルック・ファームに自由の空氣がみなぎることは、自然の數といつてよいであらう。

それは当然すぎるほど当然である。なんらあやしむをもちいぬところでなければならぬ。ところが、ブルック・ファームにおける自由は、そのトランスセンダリズムをこえてなお自由なのであるから、おどろくにたる。というのは、まづ、トランスセンダリズムは個人は神に直結するとし、フリーチャーズの要なしという。したがって、日曜日の教会通いに意義をみいださなはずであらう。そしてそれは、その否定を意味することにもなる。すくなくとも、その周囲には、そうかんがえるものも、いたうである。しかも、それにもかかわらず、そこでは、教会通いをする自由があつた。<sup>10)</sup>もちろん、それをしない自由もあつた。そのことは、いうまでもない。

さらに、リブレイが、コンミュニチーの規約を成文化することをこばんだことは、さきにかかげた、リブレイがエマースンにあててかいた手紙にもみられるとおりである。それは、それが自由を拘束することをおそれるからでなければならぬ。そう解してよからう。いな、そう解しなければならぬ。ほかに、解しようはない。しかるに、およそ、かかるコンミュニチーにおいて、規約は、そのよつてもつて立つ根本である。これなくして、どうしてコンミュニチーの運行がありえよう。いふなれば、それは、コンミュニチーの憲法である。ところが、それすらも、自由の前には、すててかえりみぬのである。その自由の尊重は、しかく大であつたのである。しかも、そのことは、ブルック・ファームが、ここに、いよいよ、その活動を開始した、いまにおいても、かわるところがないのである。それはなおしばらく、つづくのである。まことに、おどろくにたえたり、というべきである。だが、それは事実なのである。そのことは、ホーソンが、カバードールをして述懐せしめる・ブライスデール・ロマンスの中のつぎの一節によつてもうかがうことができる。

われわれは、あらゆる信条・意見をもつたもののあつまりであつた。そして、概して、かんがえ得られるどんな問題について

も、みな、それに対して寛容であった。われわれのきづなは強固ではなかった。脆弱であった。わたくしには、そうおもわれた。われわれは、いづれも、われわれの過去の生活において、なにか、あらそいのたねをもっていた。そして、それ以上、ふるい制度について行けないということについては、意見が、よく、一致していた。それでは、それにとってかわるものはいかなるものか、ということについては、一致からずいぶんとへだたっていた。われわれは、われわれの千年王国<sup>ミルレニアム</sup>のよってもって立つところの成文の規約<sup>(the written constitution)</sup>など、どうでもよかった。すくなくとも、わたくしは、そうだった。わたくしの期待は、こうであった。理論と実践の間に、一の真実・有効な生活の形式が打ち出されるだろう<sup>(Between theory and practice, a true and available mode of life might be struck out.)</sup><sup>11)</sup>

しかしながら、さすがに、いつまでも規約の成文化なくしては、すむものではない。かくて、一八四一年秋九月の末集会が開かれ、そこで、規約が成文化し、なお、いろいろの決議がおこなわれ、ここに、ブルック・ファームは名実ともに、一のコミュニティとして成立をみるにいたるのである。その規約・決議は、すなわち、つぎのとくである。

ブルック・ファーム農業・教育協会出資者組合定款 (Articles of Association of the Subscribers to the Brook Farm Institute of Agriculture and Education.)

本証書に署名し、よって下記目的のために (for the purpose and objects hereinafter set forth) 結合せられたひと、および、その財産譲受人 (their assigns) により (by) かれらの間において (between)、一八四一年九月二十九日、ここに作成・署名されたる組合定款、

第一条、本組合の名称および形式はブルック・ファーム農業・教育協会出資者とし、本組合の株式 (shares of the stock of the Association) 一または一以上を所有するものを組合員とする。各組合員は本組合の資金 (funds) に関する一切の件に

一票を投ずる権利を有する。

第二条、本組合は農業・文学、および科学の学校 (school or college) の設立および維持に必要な土地 (estate) を購入し、右の土地に本組合の主たる目的に便宜・有益とみとめられる家屋・家畜 (animals)・図書館および器具 (apparatus) を設備すること、を目的とする。

第三条、本組合の全財産は不動産・動産 (real and personal) を問はず、本組合が毎年選出する理事四名 (Four Trustees) が委託を受け、保持する。

第四条、株主はその所有する株に対して、なんら賦課を負う義務はない。株主は組合の故に (on account of the Association) かれの私有財産において個人的責任を負うことはない。理事または役員 (officer) または代理人 (agent) は、株主が個人的または私的に責任を負う契約を締結し、または債務を受け、よって株主に私的責任を負はしめる行為を為す権限を有しない。

第五条、上記の契約にしたがって組合が購入した土地またはその他の不動産の譲渡は、すべて、理事、その現任承継者 (their successors in office) または生存者 (survivors) に対して行われるものとする。ただし、その資格は合有者 (joint tenants) である。共同土地保有者 (tenants in common) ではない。

第六条、組合は株主にその組合内における所有株式額の年五分の利子を保証する。この利子の支拂は株式証書 (certificate of stock) をもってし、組合の帳簿の貸方に記入することができる。ただし、特別の指定がなければ (not otherwise appointed)、各株主は年度決算のとき (at the time of annual settlement) 自己の利子額をこえる額まで、組合資本より引き出すことができる。

第七条、株主は自己、その相続人および財産譲受人 (assigns) の発意により、前条により支拂はれる所有株式額の年五分の

利子以外、その組合へ投下した資本の運用により組合に生ずる利潤に対する一切の請求権を放棄する。

第八条、各株主は、上記五分の利子に代へて、所有する一株ごとに一人の生徒の授業 (the tuition of one pupil) または、投資の二割の利子を限度とする授業 (or tuition to an amount of twenty per cent interest on his investment) をうることができる。

第九条、株式は理事の承認がなければ他人に譲渡してはいけない。株式譲渡は理事の署名がなければ無効である。

第十条、各株主は組合の理事に一年間の予告をあたへることにより、資本およびそれより生じたる利子を回収することができる。

第十一条、組合の資本 (現在高二、〇〇〇ドル) は、これを、額面五〇〇ドルの株式に分割する。組合は自由に増資することができる。

第十二条、本定款は「ブルック・ファーム農業・教育協会の目的を推進するための動産・不動産の安全・合法、かつ秩序ある保有ならびに運営のために作成され、合意承認を得たものである。本出資者組合は右の協会の下部機構である。(to which Institute this Association of subscribers is subordinate and auxiliary.)

## 出 資

下名は、ここに、その姓名のもとに記されたる金額を、上記の組合定款にしたがつて、ブルック・ファーム農業・教育協会に投下するために支拂うことに同意する。

姓 名

株 式

金 額

G・リブレイ

一・二および三号

一、五〇〇ドル



N・ホーソン

八および一九〃

一、〇〇〇

ミノト・ブラット

四・五および六〃

一、五〇〇

チャールズ・A・ダナ

一〇・一および一二〃

一、五〇〇

ウィリヤム・B・アレソ

七・八および九〃

一、五〇〇

ソフィヤ・W・リブレ

六および一七〃

一、〇〇〇

マリヤ・T・ブラット

二〇および二一〃

一、〇〇〇

サラ・F・スターンズ

二二および二三〃

一、〇〇〇

マリアンヌ・リブレ

二三・一四および一五〃

一、五〇〇

チャールズ・O・ホイットモア

二四〃

五〇〇

# 役員

一八四一年九月二十九日水曜日ブルック・ファーム農業・教育協会の集会において下記のものがつぎのごとく役員に任命された。

## 総務

G・リブレ

ミノト・ブラット

W・B・アレソ

## 財務

N・ホーソン

C・A・ダナ

W・B・アレソ

ブルック・ファーム

ブルック・ファーム

第八十七卷

五〇

第一号

五〇

農務

W・Bアレン

ミノト・プラット

教務

G・リブレイ

ソフィア・W・リブレイ

チャールズ・A・ダナ

マリアンヌ・リブレイ

集会はC・A・ダナを記録係(Recording Secretary)に、Mプラットを会計係(Treasurer)に任命して、休会。

係。C・A・ダナ。

一八四一年一〇月三〇日、先週の木曜日は、ブルック・ファーム農業・教育協会の集会において下記事項票決。

票決一。本日附、ジョージ・リブレイ、ウイリヤムB・アレンおよびチャールズA・ダナの署名せる証書記載の条件により、ジョージ・リブレイ経営の組織を一八四一年一月一日以降ブルック・ファーム農業・教育協会に移譲の件

票決二。前掲証書の記載条件により、マリアンヌ・リブレイ経営の施設を、一八四一年一月一日以降、ブルック・ファーム協会に移譲の件。

票決三。組合員の年度決算において、各組合員は、協会のためにはたらいた時間に応じて、生活の保障をうけることができること、すなはち、一年間の労働に対しては一年間の生活、半年間の労働に対しては半年間の生活の保障をうけることができ、ならぬ労働なき場合は生活費が課される、こと。

票決四。生活費の額は当分(until otherwise ordered)週四〇〇ドル、家賃・光・熱および洗濯をふくむものとする、こと。

票決五。三〇〇日の労働は、一年間の労働に相当するものとみなされ、一人に一年間の配当を受ける権利をあたへる。これを

こゝなる労働に対しては考慮を加へぬものとする、こと。

栗沢六、五・六・七・八・九および一〇月は六〇時間を、十一月より四月までは四八時間を、六日間の労働に相当するものとみなす。

栗沢七、組合員の子供の十才以上のものには規定の生活費の半額を課する、こと。

栗沢八、生活および援養の費額は一二才以上は男児、週四ドル、女児五ドル、十二才以下は、週三ドル五〇セント、ただし、洗濯・個別暖房をふくまず、ということ。

係、C・アンダーソン・ダナ。

(1) Zoltan Haraszti, *ibid.*, pp. 14-17.

(2) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 18.

(3) Zoltan Haraszti, *ibid.*, pp. 17-18.

(4) 拙稿、ブルック・ファーム、一、経済論叢・第八六巻・第二号

(5) Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, edited by Randall Stewart (New Haven. Yale, 1932) p. 76.

(6) *ibid.*, pp. 76-78.

(7) *ibid.*,

(8) *ibid.*, p. 77.

(9) *ibid.*, p. 78.

(10) Henry W. Sams, *Autobiography of Brook Farm*, p. 81.

(11) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*, (the above mentioned edition) p. 85.

(12) Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 44-48.